

保元怨霊とその周辺

——藤原頼長・忠実の怨霊に注目して——

丸 山 航 平

はじめに

保元元（一一五六）年、鳥羽院の没後政治の主導権をめぐつて崇徳上皇と後白河天皇の間におこった争いは、摂関家内部の主導権をめぐる藤原頼長・忠実親子と藤原忠通の対立と結びつき、保元の乱に発展した。この乱は双方が武士たちを動員する戦いとなり、崇徳院側についた摂関家の藤原頼長は戦いの中で流れ矢を受けて死亡、敗北した崇徳院も讃岐に配流され、都に戻ることなく没した。勝利した後白河天皇は、近臣信西の主導のもと「抑、九州之地者、一人之有也、王命之外何施私威！」の文言で知られる新制を發布し、院政を展開していくこととなる。

当初、乱に敗北した崇徳院方は、「反逆者」として処理された。乱の直後に後白河が石清水八幡宮に奉った宣命には、頼長が「暴悪」「謀反の輩」であつたと称されており²、また崇徳院が配所にて没した際も、「太上皇（後白河）無服仮之儀、」として朝廷ではなんら対応は行われず³、その死が顧みられることはなかったことがわかる。しかし、安元年間に入ると、大極殿焼失に代表される京での火災の発生、後白河周辺の人々の死といった、さまざまな災害や異

変が後白河院の周囲を襲うようになり、その原因として崇徳院・頼長の怨霊が問題視されるようになった。こうした怨霊問題に対して、当初は否定的な立場をとっていた後白河院も、最終的には自身が祟りの対象であるという認識のもと、怨霊鎮魂のために奔走することとなった。こうした崇徳院怨霊の問題化とその対応については、『玉葉』をはじめとする貴族たちの日記の中だけでなく、『吾妻鏡』など鎌倉側の史料にも関連する記事が存在している。治承・寿永の内乱を通じて、頼朝を中心とした関東においても怨霊鎮魂の重要性が共有されるようになっていたことがうかがえるであろう。

崇徳院怨霊については、これまで主に国文学の視点から、『保元物語』『平家物語』などの文学作品における怨霊化のエピソードや、崇徳院歌壇と怨霊譚の関連性に注目した研究が進められてきた⁴。一方で歴史学においては、保元・平治の乱や後白河院政を検討する中で崇徳院怨霊に触れることはあつたが、崇徳院怨霊（あるいはそれに関連する保元の乱の怨霊）そのものを対象とした研究は盛んであつたとはいえない。

この崇徳院怨霊について、その怨霊化の経緯、後白河院政を中心とした朝廷での対応や幕府への影響、文学作品にみられる怨霊譚と実際の崇徳院の活動について網羅的に検討したのが山田雄司氏である⁵。山田氏は、当時の人々に崇徳院怨霊がどのように語られたかについて、同時代の史料上から確認できる怨霊に関する言説を網羅的に整理する一方で、讃岐配流後の崇徳院の動向や、五部大乘経の血書のエピソードなど、文学作品内で創作された「物語」としての崇徳院怨霊譚を明確に区別している。山田氏の研究は、現在の歴史学における崇徳院怨霊の基本的な理解となつていとみてよいだろう。

また、怨霊への対処については、その基本は怨霊化した人物の墓所での儀礼であるとし、追号や贈位などを通じてその霊の名誉を回復することや墓地の整備、仏教的な対応による成仏は効果があるとする一方で、儒教的な徳政や神社での祈祷は、「対処療法的対応」であり、怨霊問題の根本的解決にはならないと評価している。

ただし、こうした怨霊政策についての検討が、古代の事例をもとに検討されている点には注意が必要である。山田氏は、平安初期の早良天皇怨霊への対処を中心に上記のような分析をしている⁶が、例えば儒教的な「徳政」と呼ばれる政策だけをみても、その内容や意義は古代と中世では変化がみられるのである。こうした中世独自の展開を踏まえて、怨霊への対処の評価を再検討する必要があるだろう。

次に、保元の乱に関連して、崇徳院怨霊と共に怨霊化が問題視された頼長については、河音能平氏が久寿元（一一五四）年に紫野今宮神社でおこった、「やすらいハナヤ」というはやしことばとともに、民衆が乱舞する事件に注目している⁷。河音氏によれば、この事件の背景には、頼長が院近臣藤原家成との間に暴力事件をおこし、京都に戒厳令を敷いたことに対する反発があったという。そして、後白河院政期の寿永年間、高雄神護寺法華会の魔除けに「ヤスライハナ」が動員されたのは頼長の怨霊を避けるためだったのではないかととして、頼長怨霊と「やすらい祭」の関連について考察している。堀田穰氏は、『拾遺都名所図会』を検討して、相国寺墓地のさくら塚が頼長の塚であると示唆されていることに言及しており、「さふのつか↓さふらつか↓さくらつか」という転訛と、ヤスライハナの花が桜であることと結びつけられて、桜塚＝左府塚という連想が働いたのではないかと考察している⁸。

頼長怨霊への政治的な対応としては、山田氏が崇徳院怨霊に対する対応を検討する中で整理しているが、基本的には崇徳院怨霊に付随して登場する怨霊と理解されてきたといつてよい。例えば、徳永誓子氏は後鳥羽院怨霊とその護持僧長嚴の怨霊化について論じる中で、「同時に現れる怨霊同士の関係そのものが意味を持つ場合もあった」と指摘している⁹。そして、崇徳院怨霊が問題視される事例の中で、頼長怨霊がほぼ同時にとりあげられていることは、この組み合わせが人々に保元の乱という事件を意識させるものであったと論じている。

また保元の乱に関連する怨霊としては、頼長の父藤原忠実についても怨霊化の噂があったことが指摘されている。樋口健太郎氏は、寛喜三（一二三二）年に行われた忠実の追善のための法華八講について検討し¹⁰、この仏事の背

景には、怨霊化した忠実が祟りをなしているという慈円・道家ら九条家の人々の認識が存在したと指摘している。この忠実怨霊については、九条家では兼実の時代から重要な存在として意識されており、兼実以来、忠実の仏事供養が放置されていたことが、怨霊化の原因として挙げられている。

いずれにせよ、これまで保元怨霊の問題については、崇徳院が主体として取り扱われてきたといえよう。頼長や忠実の怨霊は、あくまでも保元の乱を想起させるための要素として理解されており、その怨霊化における個別の背景は、あまり注目されてこなかった。しかしながら、後述するように彼らも崇徳院と並んで嚴重に鎮魂がすすめられたのであり、それぞれの怨霊の意義については、別個に検討する必要があるのではないだろうか。本論文は、こうした問題意識に基づいて、保元怨霊の再考を目的とするものである。

I 保元怨霊の政治問題化

本章では、保元の乱に関連する怨霊が問題視されるようになった安元三（一一七七）年前後の記事を中心に、これらの怨霊が政治上の問題として取り上げられるようになった背景と、それに対する対応について確認していきたい。

まず、後白河院の院司をつとめた三条実房の日記『愚昧記』には、安元三年五月九日条に、以下のような記事が見えている。

讃岐院宇治左府事可有沙汰事

相府示給云、讃岐院并宇治左府事、可有沙汰云々、是近日天下悪事彼人等所為之由、有疑、仍為被鎮彼事也、無極大事也云々、

ここでは、「相府」左大臣藤原経宗によれば、近頃世間で起こっている問題は、「讃岐院」≡崇徳院と「宇治左府」≡頼長によつて引き起こされているというのであり、その鎮魂が必要であると述べられていることがわかる。こうした保元怨霊の鎮魂問題は、同月の十三日以降本格化していく。

相府示給云、讃岐院并左府等事、昨日以光能被仰遣也、頼業・師尚勘文下給之、又去年為用意、仰彼兩人并永範卿・師直等令勘儲也、昨日下午給之勘文等可見合之由、仰在茂了、存知之旨ハ、於讃岐院者、成勝寺被置国忌被行□（八）講、又於讃岐御在所同可修善坎、又於左府者、可有贈官位坎、然者於太政大臣者、其子師長、已任了、仍贈正一位准三宮坎、至智（知）足院殿准三宮不經坎云々、又此上可為神祠坎、至其条者暫祈請、若有其告者、可隨被告事坎、惣為彼兩人尤可被修追善坎、

ここでは、経宗が保元怨霊の鎮魂について、すでに前年から先例に詳しい中原氏・清原氏の外記官人や、紀伝道出身の藤原永範らの学者に、二度の勘文を作成させて準備させていたことがわかる。それによれば、鎮魂の方法として、崇徳院については国忌の設置や八講の実施、讃岐の御在所の整備などが挙げられている。頼長については、贈官が挙げられているが、頼長の子息藤原師長がこの時すでに太政大臣であつたので、正一位・准三宮を贈るべきだろうといったことなどが示されている。

その後同月の十七日には、兩人の怨霊に対する対応が正式に定められた。

讃岐院宇治左府事

讃岐院并宇治左府事、明日可令進云々、今日已清書了、院五个事・左府四个事云々、……（中略）

讃岐院御事、

一、以彼御墓所勅称山陵、其邊堀塹不令汚穢、又割民烟一兩令守御陵事、

一、遣陰陽師令鎮山陵、同遣僧侶令転経事、

一、以登霞日、於成勝寺被始修八講事、

一、被置国忌事、

一、讃岐国御墓所邊建一堂、修三昧事、

宇治左府事、

一、贈正一位事、

一、贈官事、
□□（須任）例被贈太政大臣也、而當時其官已彼子息也、可有憚款、然者可給諡号款、又可有准三宮之宣旨款

一、保元沙汰詔・宣命等可被破却事、

一、点□（彼）墳墓建立堂舎、可被修三昧事、

漢家之法、或立社稷有行祭祠之例、若有其告、可隨彼例款云々、

戸主之腋并評定詞等其状多、而忘却、仍不記之、可尋申也、多ハ付外記勘文、被注出先例也、院御事ハ崇道天王之例多載之、

基本的には前述の勘文の内容にしたがつて、まず崇徳院については墓所を山陵と称するようにして陵戸を設けると、陰陽師や僧侶の仏事による鎮魂、国忌の設置、崇徳院の創建した成勝寺での法華八講などが挙げられている。次

いで頼長については贈位贈官や祈祷のほかに、冒頭に掲げた岩清水八幡宮への宣命の破却などが示されており、頼長の名譽回復を通じて鎮魂を行うことが意図されていることがわかる。

これ以外の同年における怨霊への対処としては、右大臣九条兼実の『玉葉』七月二十九日条に以下のようにみえている。

一、讃岐院院号、並宇治左府、贈官贈位等事、来月三日可被行、此事左府被申行云々、以天神御例為証跡云々、此例不似坎、已是朝家大事也、尤可有議、而無左右被行之如何之由、世人傾奇云々、余案此事、偏可在叡慮、他人不可申是非事也、

一、改元来月四日可被行云々、

一、齋宮卜可有沙汰云々、

一、神社行事可被行云々、其数未定、先可有賀茂八幡、

一、釈奠事、於官庁可被行之由、昨日頼業所申作也云々、

即退出了、後聞、今日被行増官位並院号等事云々、使惟基、……（中略）
院号

宜止讃岐院号为崇徳院、
大外記清原頼業奉之

余案之、崇徳院号如何、

我朝、太上天皇贈号未聞、若可改讃岐院者、只可称土御門院坎、崇徳字未甘心、通典文云々、永範選申、上卿隆季卿云々、

ここでは、第一の項目に、「左府」経宗の指示によって、讃岐院の号を改めることが記されており、後半の記述から、この後に崇徳院と改められたことがわかる。また、頼長の贈官贈位等のことにも改めて言及している。さらに来月に改元を行うことが記されており、明確に鎮魂のためとはされてはいないが、怨霊を原因とする攘災の一環としてこうした決定がなされたと考えられることができるだろう。

では保元の乱から二十年以上たったこの年になって、なぜ怨霊が政治問題化したのだろうか。史料にみえていた「天下悪事」とは何を意味するのか、その背景について簡単に確認しておきたい。第一に、前年の安元二（一一七六）年、六月に二条院、七月に建礼門院・六条院、八月には九条院が没しており、上皇や女院ら後白河周辺の人物が次々と亡くなっている。このことが明確に保元怨霊と結び付けられたことを示す史料はないものの、すでに述べた通り、この年にはすでに怨霊に関する勘文が提出されており、水面下では怨霊対策が進められていたことがわかる。山田氏は後白河が自身や頼長と対立した忠通に関連した人物が次々と亡くなっていくのを目にして、崇徳院怨霊を意識するようになったのではないかと指摘している¹¹。第二に、安元三（一一七七）年の四月におこった数々の災害や社会不安があげられる。四月十三日には、山門僧たちの強訴がおこったが、神興や神人たちが矢で撃たれ、多くの死者が出たという。また二十八日にはのちに太郎焼亡と称される大規模な火災が京内でおこっている。特にこの火災は、大内裏に延焼して大極殿が焼失するなど、国家的な打撃も大きいものであった。実際保元怨霊が問題となった五月は、まさにこの火災に対して、どのような国家的対応を行うかということが議論されていた時期でもある。怨霊問題の直接の発生原因は、この火災にあるといつてよいだろう。

II 藤原頼長の怨霊とその周辺

ここまで、保元怨霊がはじめて政治上の問題として登場した、安元年間の記事について確認してきた。これらの史料を一見して明らかなのは、この保元怨霊の問題化と対処について、左大臣藤原経宗が主導的な立場にたつて指揮をとっていることである。経宗といえ、平治の乱の後、二条天皇の親政を志向して藤原惟方とともに後白河と対立し、平清盛らに捕らえられて拷問を受けたエピソードが知られている¹²が、むしろ保元の乱について、経宗自身にはあまり直接的な影響はなく、彼が怨霊を積極的に肯定する理由については明らかではない。

では、こうした怨霊の存在はいつごろから、どのような人々によつて意識されていたのであろうか。これについては、もっとも早い段階で保元怨霊について言及した人物として、藤原教長の存在が注目されてきた。吉田経房の日記『吉記』によれば「故入道教長卿、彼院籠女兵衛佐猶子也、天下擾乱之後、彼院并槐門悪霊、可奉祝神霊之由、故光能卿為頭之時、被仰合人々¹³、」とあり、藤原光能が蔵人頭であつた期間のうち、教長の京都での活動が確認できる安元二年十二月～翌年七月の間に、教長が「彼院」つまり崇徳院および「槐門」頼長を「悪霊」と認識し、その鎮魂を主張したことがわかる。教長は崇徳院の蔵人を務め、また崇徳院歌壇においても活躍が見られた人物である。乱後は出家したものの赦されず、捕らえられて応保二（一一六二）年まで常陸国に流されていた¹⁴。こうした崇徳院との関係性に注目して、山田氏は「すなわち、教長こそ、崇徳院の鎮魂をすべき旨を唱えていった中心人物なのである」と評価している¹⁵。

この教長については、これまで崇徳院との関係性の中で理解されてきたが、同時に彼が頼長との関係も深い人物である¹⁶ということにも注目すべきであろう。両者の関係を示す象徴的な史料として、『台記』の以下の記事があげられる。

一日比、余示參議教長卿曰、今度所闕之中納言、不可擧師長、將擧貴下者、答曰、恩言可足、納言非望、所畏者後世也、而家貧不能修善、若有哀憐、將預御座（※庄力）者、余以此由申禪閣、今夕、禪閣預給坂越、播磨河邊、美乃兩庄、教長卿來賀、自今夜、八ヶ夜詣行願寺、為果願也¹⁷、國

ここでは頼長が、中納言の欠員補填について、自身の子息師長ではなく教長を推薦すると述べている。教長は「納言非望」としてこれを辞しているが、その代わりに「而家貧不能修善」として庄園を預かることを望んでいる。頼長は「禪閣」忠実にこのことを伝えて、教長は坂越・河邊の兩庄の預所職を得ている。

頼長が人事においてその人物の能力や朝廷に対する「奉公」、ここでは上日の日数を基準として、これを昇進の基準とするという考えを持っていたことは、頼長が兼長・師長の二人の子息に書き記した「遺誠」の文章中に見えてくる¹⁸。実際、頼長は久安六年の除目で執筆を勤めた師長に対して、「作法頗優、」と賞すなど¹⁹、彼の能力を高く評価しており、教長も同様に頼長を頼みとする関係にあつたのである。

このように、頼長との関係という視点から保元怨霊に関する史料を再読してみると、教長以外にも彼と深い結び付きのある人物が存在することがわかる。

改めて前述の『愚昧記』安元三年五月十三日条に目を向けると、左大臣経宗が前年より二度にわたって、「讃岐院并左府等事」に関する勘文を提出させていることがわかる。この二度の勘文の作成に関わった人物として、当時大外記を務めていた清原頼業・中原師尚の両名が見えている。この両者について、頼長との関係を検討してみたい。

まず清原頼業についてみると、彼の出身である清原氏は代々明經道の学者の家であり、またこの時期にはすでに中原氏と並んで、大外記を継承する一族となっていたことが知られている²⁰。頼業の父祐隆も大外記兼助教とし

で活動しており、頼業自身も安元元（一一七五）年に明経博士となり、治承三（一一七九）年には高倉天皇の侍読を務めるなど、学者としてその能力が高く評価されている。また永万二（一一六六）年に大外記の上首である局務となつてからは、文治五（一一八九）年に没するまで二十四年に渡つて大外記を務め続けており、以降頼業の系統は局務家として大外記の上首を輩出する家を形成し、その祖たる頼業は「大々外記」と尊称されたのである²¹。

一方で、こうした頼業の官人としての出世は、必ずしも約束されたものではなかったらしい。曾我良成氏の分析によれば、当時清原氏は清原頼隆（九七九～一〇五三）以来、「定滋―定康―祐隆―頼業」の系統と、「定隆―定俊―信俊―定安」の二系統に分裂していたが、頼業の登場以前は後者の系統のみが局務大外記を輩出していたという²²。頼業の系統は実質的な傍流として扱われていたといえよう。

曾我氏は大外記に任命されるためには、職務の先例を熟知する「重代の稽古」であることの必要性を説く一方で、家司や学問の師弟関係などを通じてパトロンともいふべき「引きたつる人」とのコネクションを持つことが重要であつたと述べている。そして、頼業にとつての「引きたつる人」の一人であつたのが、まさしく頼長であつた。

では頼長はどのような形で頼業の「引きたつる人」となつたのだろうか。久安六年に頼業が明経博士・助教の補助講師である直講に任官した際の『台記』の記事には、以下のようにみえている。

是夕除目、執筆經宗朝臣、翌日披聞書之処、四位侍從師長、從四位下、任右近中将、皇后宮当年給、不任頼業、任直講、年齢未長、位階猶卑、而以弟抽賞、可謂善政²³、

ここでは頼業が「年齢未長、位階猶卑」でありながら直講に任じられたことを、頼長が「善政」と評していることがわかる。この頼業の任官については、同年四月に「招季頼於直廬、付頼業申直講文奏之²⁴、」とあるから、実は頼

長自身がこれを推薦したものである。いずれにせよここからは、頼業が前述の教長のように、頼長の支持をうけて学者・官人としての地位を確立していったことがわかるだろう。

頼業と頼長の間に個人的な関係が形成された背景については、頼長が自邸で庚子・庚申の日毎に主催していた、經書の講書や論義のメンバーとして頼業が参加していたことが挙げられるだろう。頼長の自邸講書については、『台記』に百件以上実施された記事がみえているが、頼業は講師・問者・注記として三十回以上の参加が確認できる²⁵。その中では毎回必ずしも頼長から好評を得ていたというわけではない²⁶が、とはいえ、ある回の講書では講師を務めた頼業に対し、「依例講老子經、有詩、講師肥前介頼業、說經論義優美²⁷、」という記事などもみえている。こうした講書への参加を通じて、頼業が頼長からの評価を得るようになっていったことは想像に難くない。

このように頼業が保元怨霊の問題に対して、勘文提出などを通じて、積極的に関与した背景については、彼が頼長の庇護をうけていたことを想定することができよう。とはいえ、頼業がこうした怨霊政策を通じて、頼長の名誉回復を期待したかどうか、明確に示す史料は存在しない。しかし、安元年間の二度の勘文作成が、經宗の主導のもと行われていたことは注目すべき点である。説話ではあるが、十三世紀中頃に成立したとされる、『古今著聞集』の「大外記頼業中御門左大臣經宗家へ参り毎度飲酒の事」には、以下のようなエピソードが記されている。

中御門左大臣家へ、大外記頼業はつねに参じけり。まいるたびごとに、必瓶子一肴物を、座の前にをかければ、しばし公事の物語申ては、みづからからぶけてのみつつ、終日伺候しけり。まかりいでぎまに、障子のかみ邊にて、「あはれ一上や」とたびごとに申ける、いと興ある事也²⁸。

頼業は「中御門左大臣」經宗邸に参り、飲酒をして「公事の物語」をするのが常であったという。經宗と頼業の関

係性の深さを示すエピソードであるといえよう。そして注目すべきは、頼業はその度毎に「あはれ一上や」と申して「一上」頼長を偲んでいたのだという。この「あはれ一上や」という台詞をどう解釈するかは、実際難しい問題ではある。とはいえ、この頼業—経宗という組み合わせが、後世の人々に頼長を想起させるものであったということは、頼長怨霊の問題を考える上で、興味深い要素であるといえるのではないだろうか。

次いで、同じく二度の勘文作成に関わっていた、中原師尚について検討してみたい。師尚は安元三（一一七七）年当時、頼業と並んで次席の大外記を務めていた。中原氏も清原氏と同様局務を輩出する家を形成しており、中原氏の場合は師尚の系統と、初度の勘文作成に名前がみえていた師直の系統が局務家を形成している²⁹。

一方、頼業と比較すると、師尚と頼長との直接的な接点は多くはない。前述の頼長自邸講書についても、保元の乱の直前にあたる久寿二（一一五五）年に二回参加の例がみえるのみである。これは師尚が天承元（一一三二）年生まれで、久寿二年当時でも二十四才とまだ若年であったことに起因すると思われるが、いずれにせよ頼長が個人的に師尚の能力などに言及した記事を見出すことはできない。

師尚については、むしろ彼の父師元と頼長の関係に注目するほうが明快である。師元は永暦元（一一六〇）年に局務大外記となり、頼業が局務となる永万二（一一六六）年までその地位にあつた。頼長の講書については、名前が確認できるのは七件（当日の欠席を含まず）であり、頼業と比較して積極的であつたとはいえない。とはいえ、師元が講師を務めた『周礼』講では、「説経又優美、本道人、奉仕此役、自今夜、始而講論、皆以優美、道之光華、家之名譽、身之面目、何事如之³⁰。」と頼長に絶賛されており、学問的能力について頼長から高い評価をうけた人物であることが明らかなのである。

また師元については、頼長の父忠実との関係が深いことも知られている。忠実の言行録である『中外抄』は、保延三（一一三七）年から久寿元（一一五四）年までの忠実の言談を二巻にわたって師元が記録したものであり、そこか

らは、師元がしばしば忠実の諮問にあずかる立場にあつたことがわかる³¹。こうした父師元の頼長・忠実とのつながりをうけて、師尚の立場が構築されてきたということは、彼が保元怨霊の問題に関与するのに十分な理由だったと考えることができるのではないだろうか。

ここまで、安元年間における保元怨霊の政治問題化について、これまであまり注目されてこなかった頼長の怨霊化に目を向けて、経宗のもとで勘文の作成に関わった頼業・師尚兩名の影響について検討した。もちろん、これまで指摘されてきた教長の活動が、保元怨霊問題の活発化につながっていたのは間違いないといえよう。しかしながら、前述の通り教長はこの時点ですでに出家しており、政治への直接的な影響力はほとんど持ち合わせていなかったと考えられる。実際の政治上の問題としてこの怨霊を取り上げるためには、先例を勘進する大外記らの裏付けや、それをもとに政策を決定する経宗のような大臣クラスの人物の支持が必要不可欠だったのではないだろうか。いずれにせよ、保元の乱後の朝廷にも、依然として親崇徳派・親頼長派ともいべき人々が生き残っており、保元怨霊がこうした人々に支えられていたということには注意すべきであろう。

III 九条兼実の怨霊観と「徳政」

本章では、経宗と並んで当時の朝政に主導的な役割を果たした右大臣九条兼実について、彼が保元怨霊をどのような認識していたかを検討する。

すると、意外にも兼実は、少なくとも安元年間についてはこの保元怨霊の問題について、極めて冷静な態度をとっていることがわかる。例えば一章に示した『玉葉』七月二十九日条を改めて見てみると、兼実は「余案此事、偏可在叡慮、他人不可申是非事也、」として、怨霊問題は「叡慮」、つまり後白河院個人の問題であって、他人が是非を決め

るようなことではないと記している。また崇徳院の院号についても、「余案々、崇徳院号如何、」として、疑問を呈している。兼実は、太上天皇に対する諡号は前例がなく、もし讃岐院の号を改めるのであれば、ただ（崇徳院の用いた土御門内裏からとつて）土御門院と称すればよいだろうと述べているのである。

このように兼実は、国家として怨霊に対処することについて懐疑的な姿勢を見せていることがわかる。こうした背景としては、十分な議論を尽くさないまま、次々と政策を決定しようとした経宗に対する、兼実の警戒心を理由にあげることが出来るだろう。では、この安元年間に続発した災異について、どのようにこれを鎮めるべきであると考えていたのだろうか。しかし、大極殿が焼失した太郎焼亡の当日、兼実は以下のように書き残していることに注目したい。

火災盜賊、大衆兵乱、上下騒動、縉素奔走、誠是乱世之至也、非人力之所及、天変雖頻呈、法令敢不改、致殃招禍、其不然哉、**熒惑入太微、涉旬涉月、熒惑是火精也、太微即宮城也、華洛成灰燼、変異之驗、可謂揭焉欤、故殿常仰云、末代之天変、咎微速疾、是不施化不行徳之所致也**云々、先賢之語誠矣此言³²、

兼実はこの日の火災や、同年の強訴について、**熒惑（火星）**が太微に入るという天変から災いの発生を考察しており、こうした天変に基づいて災害がおこったことは、「故殿」忠通の言によると、「**不施化不行徳之所致**」として、不徳の政治が行われていることに起因するのだという。このように兼実は天変が示されていることを理由に、災害や兵乱といった問題を徳政の実施を通じて対処するべきであると考えており、そのために怨霊への対処を重視していないことがわかるのである。

では、兼実にとつて「徳」のある政治、つまるところ「徳政」とは、具体的にはどのような政策を指すのだろうか。

これについて、兼実は以下のような構想を持っていたと考えられる。治承五（一一八二）年、大規模な飢饉（養和の飢饉）が問題となる中で、兼実は「可依変異被行攘災事、」として、後白河院に対して以下のように意見を奉っている。

右客星古文中、有外寇入国之説云々、而当時、関東、海西、寇賊姦究也、倩案之、人事失於下、天変見于上、不可不戒慎者欤、但銷天譴濟人物者、只在祈請与徳化……（中略）徳政之条、今当此時、難及号令欤、聖人之道、察機応時之故也、但不救民憂者、其条通天譴何、夫国者以民為宝、既是古典之明文、……（中略）頃年以来、炎旱涉旬、飢饉累日、加之、両寺之造営、兵糧之苛責、偏費人力、無息民肩、万人抱楚痛之悲、天一含荼苦之怨、然而、両箇大営、一而難略、須定折中之法、被施恵下之仁欤、兼又諸人訴訟、委搜真偽、早任正道、可被裁断欤……³³

兼実は攘災には「祈請」と「徳化」の二事が重要であると述べており、このうちの「徳政」については、「夫国者以民為宝」という「古典之明文」を引いて、兵糧や寺社の造営など、民衆の苦しみを除くことの重要性を説いている。そして、増加している「諸人訴訟」についても、これに早急に対処することが「徳政」の内容として語られているのである。

では、兼実はこうした怨霊の問題に対して、常にこれを災異の発生と別の問題として考える立場をとっていたかという点、必ずしもそうではなかったらしい。『玉葉』文治二（一一八六）年二月十八日条には、以下のような記事がみえている。

此日、奉為故知足院殿、於堂供養仏經、導師仏嚴聖人、……（中略）

近日天下之乱、偏保元怨霊所為之由、有夢想等、仍且為鎮天下、且為訪冥途、殊所修此仏事也、

兼実はこの日、導師仏嚴のもと、「知足院殿」忠実の供養を行ったという。それは「近日天下之乱」が「保元怨霊」のために引き起こされているという夢想があつたからだといひ、忠実の鎮魂が天下の混乱を鎮めるためのものとして行われていることがわかる。

治承・寿永の内乱期に入ると、保元怨霊は兵乱と結びつけて理解されるようになっていく。例えば、寿永年間には、『玉葉』に「近曾以来乱逆連綿、天下不静、依彼冤霊、有此災難之由、世之所思也³⁴、」というように、「彼冤霊」つまり崇徳院怨霊を「乱逆」と結びつける記述が見えるし、『吉記』にも、「保元已後連々雖有乱逆、何時可及今度哉、於根本者、故不記之、偏是讃岐院怨霊之所為³⁵、」というような記述があり、当時社会にこうした内乱の原因を怨霊に求める意識が蔓延していたことがわかる。忠実怨霊について言及しているものは上記のほかに確認できないが、兼実が祖父忠実の怨霊に対する意識を通じて、「保元怨霊」が天下を乱れているという理解を得るようになっていったことについては注目すべきであろう。

しかしながら、兼実の怨霊に対する姿勢の転換があつたとはいえ、攘災に対して徳政こそが最も重要であるという彼のスタンスが失われたわけではない。文治三（一一八七）年五月、兼実は院の諮問に以下のように答えている。

権弁定長為院御使来云、天下魔縁競起之由、顕然之上、又有夢告、有世之謳歌、何様可有沙汰、可令計申、每家可奉安置不動尊之由、有申人、如何云々者、申云、当時被仰諸宗有御祈、即为仏如此等之事也、其上諸卿被召意見、随彼趣被施徳化者、善神可擁護之不空者、又魔縁不可競、然則禦邪鬼之計、不可過徳政³⁶、

ここで兼実は、「天下魔縁競起」という怨霊の問題が顕然化した状況に対して、どのように対処するべきかという後白河院の諮問に対し、仏教的政策による対応と合わせて、諸卿に意見を求めて、「徳化」を施せば善神の擁護があるとしており、そして邪鬼を防ぐためには「徳政」が最も効果的であると述べていることがわかる。「諸卿被召意見」とあるのは、意見封事などを通じた臣下による諫言であり、これも徳政の一種といえることができる。このように兼実が保元怨霊への対応に積極的になっていく背景には、文治二（一一八六）年に兼実が摂政に就任し、経宗も前年の義経追討問題で立場を悪化させるなど、両者の力関係の微妙な変化も考慮に入れる必要はあるだろう。とはいえ、山田氏が述べるような儒教的政策が怨霊に対しては対処療法的なものではないという理解は、少なくとも兼実の場合にはあてはまらないと考えることができるのである。

ここまで、兼実に注目して、彼の怨霊観を徳政との関連から検討した。兼実は安元年間に保元怨霊が問題になった当初は、これを後白河個人の問題として距離を置き、災害や異変に対してはあくまでも徳政による解決を目指す姿勢を見せていた。しかし、治承寿永の内乱期になると、忠実怨霊の問題への対処などを通じて国家的問題として怨霊を認めるようになっていく。しかし兼実の場合には、こうした怨霊に対しても、仏教的な祈祷政策とあわせて、徳政を行うことでこれを鎮めることができると考えていたのである。

ところで、前章で怨霊発生との関係を論じた人物のうち、特に清原頼業については、しばしば兼実の諮問にあずかる立場にあり、承安二（一一七二）年以降、兼実の家司として活動していたことが知られている³⁷。注目すべきは、これまで述べてきたような兼実の徳政観に大きな影響を与えていたのが、この頼業であったということであろう。

『玉葉』安元三（一一七七）年三月七日条には、兼実のもとを訪れた頼業が、兼実の「条々雑事等」に関する質問に答えた後、以下のような話をしている。

此次示云、全經之所判、天變有二義、一者、變異先呈、禍福後顯、是必然而不感、一者、變異不可必果成、所以何者、為使君施治政、為使臣竭忠節、以棄惡取善之謀、天示之、因之聖主施德政、變早退也、以此說為勝云々、又申云、世之衰微、逐日速疾、可恐可悲云々、良久退出了、

賴業によれば、天變には「二義」があり、一つは變異が先にあらわれ、その禍福が後にわかるというものであるという。そしてもう一つは、「為使君施治政、為使臣竭忠節、以棄惡取善之謀、」を求めて、天が變異を示すというものであり、後者について、「聖主施德政」ことで變異を鎮めることができる」と述べて重要視している。同日の記事には、兼実が賴業の能力を「其才可謂神」と評した箇所があるように、兼実は賴業の意見に強い共感を示していることがわかる。この発言が安元の大火の直前におけるものであったことも含めて、賴業が兼実と同様に、變異を鎮めるためには德政が必要であると考えていたことがわかるだろう。そして「全經之所判」とあるように、こうした德政観は經書、つまり儒教思想に基づく理解であつた。少なくとも賴業にとつて保元怨靈の鎮魂は、儒教思想にもとづく德政と矛盾するものではなく、こうした理解は兼実にも継承されていたと考えることができるのではないだろうか。

そしてこうした意識は、兼実の意見を通じて後白河側にも認識されていたものと考えられる。『吾妻鏡』には以下のような記事がみえている。

四日甲申、勅使江判官公朝歸洛、二品御餞物尤懇懃也、此程依風氣逗留涉日云々、又依去七月大地震事、且被行御祈且可被滿遍德政於天下事、并崇德院御靈殊可被奉崇之由事等、被申京都、是可奉添 朝家寶祚之旨、二品御存念甚深之故也云々³⁸、

ここに登場する「勅使」大江公朝は後白河院の北面の武士であるが、彼によると、元暦元（一一八四）年の地震について、祈祷・徳政を天下に行うと同時に、「崇徳院御霊」を崇めるようにとのことが後白河院の意思として伝えられていることがわかる。ここでは徳政を行うこと、崇徳院の鎮魂を行うことが並立となっており、徳政によつて怨霊を鎮めるという理解にはなっていない。とはいえ、前年の地震という災害の発生に対して、これを怨霊によるものと認めつつ、徳政の実施もその対策として必要なものと認識されていることには注意する必要があるだろう。

おわりに

保元怨霊の問題化については、祟りの最大の当事者であった後白河院がまずその存在を認識することが大前提である。とはいえ、その背景には頼長と深い関係を結んでいた教長や頼業・師尚といった人々の存在があり、怨霊の対処については、後白河に徳政の必要性を説こうとする兼実の政治方針の影響が見られることが明らかとなった。怨霊は災害を引き起こす怪異と認識されるが、それが単純な信仰にのみとづいて現れるのではなく、怨霊を喧伝する人々がなんらかの政治的な意思を仮託しながら顕れるものである、という理解が重要である。保元怨霊については本論でみた時期以外にも政治上の問題となっているが、それぞれの時期においてどのような意義付けがなされていくかということまでは、今回十分に検討できなかった。今後の課題として、さらなる調査を進めていきたい。

- 1 『平安遺文』二八七六号（書陵部所藏壬生家古文書）
- 2 東京大学史料編纂所編『大日本古文書 家わけ第四（石清水文書之二）』東京大学出版会 一九五二
- 3 『百鍊抄』長寛二年八月二十六日条
- 4 原水民樹「崇徳院の復権」『國學院雜誌』八七・八 一九八六 野中哲照「『保元物語』の構造——崇徳院怨霊譚と為朝渡島譚との関わりから——」『国文学研究』一〇七 一九九二などを参照。
- 5 崇徳院怨霊に関する山田雄司氏の研究については、『崇徳院怨霊の研究』（思文閣出版 二〇〇二）、『怨霊・怪異・伊勢神宮』（思文閣出版 二〇一四）、『跋扈する怨霊』（吉川弘文館 二〇〇七）、『怨霊・怪異・伊勢神宮』（思文閣出版 二〇一四）などを参照。
- 6 山田雄司「怨霊への対処——早良親王の場合を中心として——」（『怨霊・怪異・伊勢神宮』思文閣出版 二〇一四）
- 7 河音能平「ヤスライハナの成立」（『中世封建社会の首都と農村』東大出版会 一九八四）
- 8 堀田穰「サムライと怨霊——崇徳院・悪左府頼長にとつての保元の乱と怨霊化——」（『京都学園大学人間文化学会紀要』三〇 二〇一三）
- 9 徳永誓子「行部僧正長嚴の怨霊」（東アジア怪異学会編『怪異学の技法』臨川書店 二〇〇三）
- 10 樋口健太郎「藤原忠実の追善仏事と怨霊」（『中世王権の形成と摂関家』吉川弘文館 二〇一八）
- 11 山田雄司「崇徳院怨霊の胎動」（『崇徳院怨霊の研究』所収 思文閣出版 二〇〇一 初出一九九八）
- 12 元木泰雄「藤原経宗」（『保元・平治の乱と平氏の栄華』中世の人物 京・鎌倉の時代編 一 清文堂出版 二〇一四）
- 13 『古記』寿永三年四月十五日条
- 14 岩橋小弥太「藤原教長」（『国語と国文学』三〇—三二 一九五三）
- 15 前掲山田前論文¹
- 16 前掲岩橋論文¹⁴
- 17 『台記』久寿元年五月十八日条
- 18 『台記』仁平三年九月十七日条
- 19 『台記』久安六年正月二十七日条

- 20 井上幸治編『外記補任』（続群書類従完成会 二〇〇四）、松園斉「中世の外記について―局務家の形成―」（『日記の家―中世国家の記録組織―』吉川弘文館 一九九七）
- 21 清原頼業については向居淳郎「清原頼業伝」（『日本史研究』三 一九四七）および、和島芳男「清原頼業論」（『大手前女子大学論集』五 一九七二）などに詳しい。
- 22 曾我良成「清原頼隆と清原頼業の間」（『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』一八二二 二〇〇七）
- 23 『台記』久安六年十二月二十二日条
- 24 『台記』久安六年四月二日条
- 25 頼長の自邸講書については、小島小五郎『公家文化の研究』（国書刊行会 一九四二）、高橋義彦『藤原頼長』（吉川弘文館 一九六四）、仁木夏実「藤原頼長自邸講書考」（『語文』八四 二〇〇六）などに詳しい。
- 26 前掲和島論文²¹
- 27 『台記』久安元年二月四日条
- 28 永積安明、島田勇雄校注『古今著聞集』（『日本古典文学大系 八四』岩波書店 一九六六）
- 29 前掲書十七および前掲論文十七
- 30 『台記』康治三年二月二十一日条
- 31 『江談抄 中外抄 富家語』（『新日本古典文学大系 三二』岩波書店 一九九七）
- 32 『玉葉』安元三年四月二十八日条
- 33 『玉葉』治承五年七月十五日条
- 34 『玉葉』寿永二年八月十五日条
- 35 『古記』寿永二年十一月十九日条
- 36 『玉葉』文治三年五月三日条
- 37 『玉葉』承安二年十一月二十六日条
- 38 『吾妻鏡』文治元年九月四日条